

# 芭蕉の俳文「阿弥陀坊」の成立過程

赤羽学

## 一

西行の『山家集』に、

いにしへころ、東山にあみだ房と申ける上人の菴室にまかりてみけるに、哀とおぼしてよみける。

柴の庵ときくはいやしき名なれどもよにこのもしき住る也けり（『六家集』本による）

という歌がある。初めにこの歌を置き、次に文章と発句を添えた芭蕉の俳文が、史邦の『芭蕉庵小文庫』（元禄九年刊）に収載された。以後この俳文は、おおむね『小文庫』によって流布したが、若干内容の違うものが、真蹟もしくはその模刻として存在し、それらの間に推敲関係が予想される。そこで本稿では、「阿弥陀坊」関係の資料を網羅して、その成立過程を跡づけると共に、同時にその問題点を明らかにしたい。

まず、私見によって、その俳文を成立順と思われる順序に従って紹介してゆく。第一は、『定本芭蕉大成』の口絵に紹介された真蹟で、所蔵者は野村胡堂である。

しほのいほときけへ  
いやしき名なれともよに  
このもしきものにそ有  
ける

このうたは東山に住ける  
僧をたつねて西上人  
のよみ持るとかや猶その  
あるしのこのもしけれへ

はせを

草の戸の月や其まゝ

あみた坊

これは、昭和二十八年五月の芭蕉二百六十年忌記念展覧会に、追加として出品された。

第二は、道彦編『あみた坊』（寛政五年刊）に模写されたもの

である。

柴の庵ときげは

いやしき名なれとも

よにこのもしき

ものにそ有ける

ときこへ侍るは

ひかし山に住ける僧

をたつねて

西上人の

よませたまひけると

なむうけたまはる

そのあるしの僧こそ

このもしけれ

はせを

しはのとの

月やそのまゝ

あみた坊

これには、次のような添書がつけられている。

このかなかきをうつして思ふ事あり橙ミかん」柚子何れ同じ  
なから金柑といふもの少し」ことなるとふるき人の申されし

か斯筆意の「うつらぬも人からの及はぬゆへかよしそれも又  
花たちはなの香にたくへとそうしひらきし」はしめにおく事  
を「巢兆拜白」

これによれば、これは、巢兆が芭蕉の真蹟を模写したものらしい。  
巢兆は、「筆意のうつらぬも人がらの及はぬゆへか」と反省して  
いるが、原文は正しく伝えていると思う。

ところが、この『あみた坊』伝来の文について、一つの疑問が  
介在する。それは、勝峯晋風編『新芭蕉一代集文庫編』(昭和六  
年刊)所引の「あみた坊」との関係である。勝峯氏は、その前の  
『日本俳書大系』(原版大正十五年普及版昭和三年)では、「阿弥陀坊」の句文を  
『小文庫』から引き、俳句の部に収めたが、『芭蕉一代集』に至  
って俳文として独立させ、『あみた坊』からの引用として、次の  
文を掲載する。

あみた坊

元禄四年作

其二 あみた坊

柴のいほときげばいやしき名なれども

よにこのもしきものにそ有ける

このうたはひがしやまに住ける僧をたつねて、西上人のよみ  
侍るよし山家集にのせられ侍る。いかなるあるじにやとなつ  
かしければ、ある草庵の坊につかはし侍る。

しばの戸の月や其まゝあみた坊 はせを

この文は、私が先にあげた道彦編『あみた坊』所載の文とは違つたもので、勝峯氏がどうしてこれを「『あみた坊』に摹刻されてゐる」ものとして紹介したか不審である。「定本芭蕉大成」「校本芭蕉全集」「古典俳文学大系」は、いずれも、勝峯氏の記載を信じて校訂に用いているが、道彦編『あみた坊』のものとは、全く別物であることを銘記すべきである。尚、この文は、これから私が推定する推敲過程に参与し得るかどうか、伝来についての疑問と共に説明が必要である。

第三は、文化十年に常陸の本間家が編んだ『鹿島詣』に模刻され、後に水戸家に献上された真蹟である。この真蹟は、現存し、伊藤松宇編菊本直次郎発行の『蕉影余韻』（昭和五年）並びに藤井乙男ら編『芭蕉函録』（昭和十八年）に複製されている。この箱書には、藤田東湖の筆で「芭蕉真蹟一幅天保甲午七月小川村暨本間道陸所獻」とある。昭和二十八年五月の芭蕉展に出品され、その目録の記載によれば、大正十五年水戸家の売立の際、本山竹荘氏の有に帰し、のち菊本氏を経て紫羊文庫に入った由である。

柴のいほときけは

いやしきなれとも

よにこの

もしき

ものにそ

有ける

このうたは東山に住ける  
僧をたつねて西行上人の

よませ給ふよし山家集に

のせられたりいかなるあるし

にやとこのもしくてある

草庵の坊につかはしける

はせを

しはのとの月や

そのまゝあみた坊

本間家の『鹿島詣』に模刻された「阿弥陀坊」は、「柴のいほ」の歌と、芭蕉の文と、発句とを、それぞれ一頁ずつに配して、白字で表わしている。『一葉集』は、この系統の本文で、作者名の「はせを」を欠くだけで、他は真蹟に一致する。

第四は、『芭蕉庵小文庫』所収のものである。

柴の庵ときけはいやしき名なれとも

よにこのもしき物にそ有ける

此うたは東山に住ける僧を尋て

西行のよませ給ふよし山家集に

のせられたりいかなる住居にやと

先その坊なつかしければ

柴の戸の月や其まゝあみた坊 芭蕉

この文は、芭蕉の死後、最も早く公にされたもので、広く一般に流布した。土芳の『蕉翁句集』（宝永六年）、蝶夢の『芭蕉翁発句集』（安永三年刊）所収のものは、この系統で、『小文庫』所収のものとの間に、わずかに相違を見せるが、取り立てるほどのことはない。

## 二

以上掲げた四種類の「阿弥陀坊」は、真蹟もしくはその模写、及び信頼できる刊本に収められたもので、いずれも芭蕉の手に成るとみてよからう。それに対して、勝峯氏が誤って『あみた坊』からとして引いた異文はどうか。これも、その出所は不明であるけれども、積極的に芭蕉の作を否定するようなデータは見つからない。従ってこれを一種に立てれば、都合五種類の「阿弥陀坊」が存在したことになる。その成立過程を、勝峯氏所引の文を含めて、改めて予想すると、一応次の如くなる。

- (1) 野村家蔵真蹟
- (2) 道彦の『あみた坊』所載巢兆模写
- (3) 水戸家旧蔵真蹟
- (4) 『芭蕉一代集』所載文

(5) 『小文庫』所載文

- (1) しいはのいほときけへいやしき名なれとも
- (2) 柴の庵ときけはいやしき名なれとも
- (3) 柴のいほときけはいやしきなれとも
- (4) 柴のいほときけはいやしき名なれとも
- (5) 柴の庵ときけはいやしき名なれとも
- (1) よにこのもしきものにそ有ける……
- (2) よにこのもしきものにそ有けるときこへ侍
- (3) よにこのもしきものにそ有ける……
- (4) よにこのもしきものにそ有ける……
- (5) よにこのもしき物にそ有ける……
- (1) このうたは東山に住ける僧をたつね
- (2) る……はひかし山に住ける僧をたつね
- (3) このうたは東山に住ける僧をたつね
- (4) このうたはひかし山に住ける僧をたつね
- (5) 此うたは東山に住ける僧を尋
- (1) て西・上人のよみ・侍……るとかや・
- (2) て西・上人のよませたまひけるとなむうけ

- (3)て西行上人のよませ給 ふ、……  
 (4)て西・上人のよみ・侍……る……  
 (5)て西行……のよませ給 ふ……

- (1)……猶……  
 (2)たまはる……

- (3)……よし山家集にのせられたり・いか  
 (4)……よし山家集にのせられ侍る・いか  
 (5)……よし山家集にのせられたり・いか

- (1)……そのあるし……の……このも  
 (2)……そのあるし……の僧こそこのも  
 (3)なる……あるしにやと……このも  
 (4)なる……あるしにやと……なつか  
 (5)なる……住居……にやと先その坊……なつか  
 (1)しけれへ……  
 (2)しけれ……  
 (3)しくて……ある草庵の坊につかはしける  
 (4)しけれは……ある草庵の坊につかはし侍る  
 (5)しけれは……

- (1)草 の戸の月や其 まゝあみた坊 はせを  
 (2)しはのとの月やそのまゝあみた坊 はせを  
 (3)しはのとの月やそのまゝあみた坊 はせを  
 (4)しはの戸の月や其 まゝあみた坊 はせを  
 (5)柴 の戸の月や其 まゝあみた坊 芭蕉

右に掲げた五種類の「阿弥陀坊」の外に、尚別の資料が存在するかもしれない。また(4)は出所不明であるから、芭蕉の文とするには、いささか躊躇される。(5)は、刊行されたものだから、編者の手が加わっているかもしれない。色々な不安はあるけれども、現在知られる限りの資料から、それらの成立の順序について、一つの仮説を樹てることは、無意味でないと思う。仮りにこれらが全部芭蕉のものであるとして、果してその成立順序を推敲という意識で叙列化していいであろうか。芭蕉は、乞われるままに、同じ内容のものを少しずつ違えて書いたまでであって、それらの間に推敲の意識などはなかったと考えることもできる。しかし、前の文と違えて書く場合、やはり、少しでもましなようにと願うのが作家の本能というものである。その中でも芭蕉は、特に文章の推敲に念を入れた作家である。これらの異文も広い意味で推敲過程にあるとみてよからう。

「阿弥陀坊」の文の推敲過程を探る糸口となるのは、それを初稿の位置に据えるかということである。それは、発句の形が手掛

りとなる。発句は、(1)のみ「草の戸」とあり、(2)(3)が「しはの」と(4)が「しはの戸」、(5)が「柴の戸」である。表記の相違はともかくとして、(1)のみ「草の戸」であるということは、それが「柴の戸」に定着する以前の形であったこと示唆する。この逆に、「草の戸」を最終案と考えることもできるが、四回も「柴の戸」を用いた後に一回だけ「草の戸」を用いるのは極めて不自然である。同様な例として、近年新資料が次々に発見された「笠やどり」並びに「笠はり」の発句についてみると、

(一)世にふるも更に宗祇のやとり哉(真蹟笠やどり)

(二)世にふるも更に宗祇のやとり哉(真蹟笠はり)

(三)世にふるもさらに宗祇のやとり哉(虚栗)

(四)よにふるも更にそうきのやとり哉(真蹟かさの記)

(五)世にふるも更に宗祇のやとりかな(秋野集笠の記)

(六)よにふるも更に宗祇のやとり哉(思亭笠はり)

(七)よにふるも更に宗祇のやとり哉(伝真蹟笠はり)

の如く、(一)のみ「世にふるは」であり、以下連続して「世にふるも」となる。

かくして、(1)を初稿と定めれば、必然的に(2)がその次となり、(3)が続く。以下(3)(4)(5)の順は極めて微妙であり、やや詳細な検討を要する。

### 三

これらの文の前後関係を吟味するには、まず(1)(2)(3)の文につい

て調べ、次に(3)(4)(5)の文に及ぶというように、二段階に分けて考えるのが有効である。(1)は、(2)に一致する所と、(3)に一致する所とがある。(1)と(2)の一致する所は、

(一)西上人

(2)西上人

(一)1)そのあるしの

(2)そのあるしの

(三)1)このもしけれ

(2)このもしけれ

の三個所である。それに対し、(1)と(3)が一致するのは、

(1)このうたは東山

(3)このうたは東山

の一個所である。しかし、(3)は(1)に対し、

西行上人のよませ給ふよし山家集にのせられたりいかなるあるしにやと

の箇所が決定的に違っており、しかもここは、(4)(5)と一致する文面であって、(3)は(1)よりも(4)(5)に近いとしなければならぬ。それに対して(2)は、

ときこへ侍る

という独自の本文を持つとはいうものの、

(1)西上人のよみ・侍・・・るとかや・・・

(2)西上人のよませたまひけるとなむうけたまはる

といった、比較的(1)に近い文面を有し、(3)よりも(1)に近い本文であることは明瞭である。しかし、部分的に(3)に近い個所も認められる。

よませたまひける

よませ給ふ。

この所は、(2)が(3)への移行過程であることを示している。

次に、(3)(4)(5)の関係について検討を加える。まず、(3)と(4)が一致して、(5)と違う所を掲げる。

(一)(3)あるし

(4)あるし

(二)(3)ある草庵の坊につかはし

(4)ある草庵の坊につかはし

この二個所は、(3)と(4)の近さの度合をはかる重要な所見である。

殊に(二)は、(3)と(4)の緊密な関係を決定的にする。(3)と(5)は、

(一)(3)よませ給ふ

(5)よませ給ふ

(二)(3)のせられたり

(5)のせられたり

の二個所において近いが、何よりも末尾の、

(3)ある草庵の坊につかはしける

の欠落は大きく相違する。(4)は、

西上人のよみ侍る

の所が(1)に一致するが、一方重要な点で(5)に一致する。それは「なつかし」である。これを(1)から(5)まで並べてみる。

(1)このもしけれ、

(2)このもしけれ、

(3)このもしくて、

(4)なつかしければ

(5)なつかしければ

これは、『山家集』にのせられた「阿弥陀坊」に対する芭蕉の情感を示した言葉で、この種の主観語は、制作時の一定の気分に対応する。つまり、「このもし」と「なつかし」が気まぐれに交互に使われるというようなことはなく、ある時までは「このもし」で、ある段階で「なつかし」に変わったものと考えられる。従って、(4)(5)を(3)以前に遡らせて、「このもし」の中に「なつかし」を割り込ませることは、正しくない。そうすると、(4)は、(3)の「このもし」が「なつかし」に変わっているという点で、(5)への移行過程にあると考えられる。

ただ(4)は、(1)の「西上人のよみ侍る」、(3)の「あるし」、(5)の「なつかし」、(3)の「ある草庵の坊につかはし」などを混ぜさせた折衷本文であって、偽作の難いが持たれぬこともない。しかし、「阿弥陀坊」の本文が五種類も集ったのは、最近のことであって、文献の整わない時期において、そうした偽物を捏造することは、不可能に近い。それで、(4)に(1)(3)(5)に一致する文面が現れること

は、逆にこれが芭蕉の文であることを証するもの如くである。

(5)の末尾が単に「なつかしければ」で終り、「ある草庵の坊につかはし侍る」を省いたのは、なぜであろうか。それは、

いかなる住居にやと先その坊、

という文の挿入とかかわる。芭蕉は、「住居」と「坊」を前に出すことによって、「ある草庵の坊につかはし侍る」といった説明的な辞句を切り捨てたのである。また「その坊」の「その」は、(1)(2)の「そのあるしの僧」の「その」を取ったものである。このようにみると、芭蕉は、先に書いた文の下書を留めていて、それらの中から必要な言葉拾い、それらを構築して、次第に満足していく文章に作り替えていったものと想像される。

#### 四

次に「柴の戸」の句の伝来と、成立年次について考えておきたい。これが文と共に初めて世に現れたのは、元禄九年刊『小文庫』であったことは、前述した。続いて、元禄十一年刊『泊船集』に、柴の戸の月や其まゝあみた坊

此句のはしきき小文庫ニ見えたり

とあり、これが『小文庫』の抜き書きであることは言うまでもない。以後この影響が続く中で、土芳の『芭蕉句集』と、蝶夢の『芭蕉翁発句集』が、この句文を元禄四年の条に挙げたのは示唆的である。

元文四年の『芭蕉句選』は、「柴の戸」の句のみをあげるが、

それに注した石河積翠の『芭蕉句選年考』は、

或人所持の真蹟小文庫と同様にて、山家集にのせられ給ふ、いかなるあるじにやとゆかしくて或草庵の僧に遣しける「草の戸の月や其儘あみた坊」とあり。

と、或人所持の真蹟を伝える。この真蹟は、発句が「草の戸」であるので、(1)(野村家蔵)との関連が考えられるが、文章は全く違い、(2)と(3)の間に入りそうである。ともかく全文が知られないのが残念である。岡田利兵衛氏は、『芭蕉の筆蹟』(昭和四十三年)において、

「阿弥陀坊」懐紙は有名品であったから「にせもの」もある。と注意しておられる。これも「にせもの」の類であろうか。私の考えている推敲過程にはあてはまらない。

発句が「草の戸」となっている真蹟短冊が、野村家蔵真蹟懐紙とは別に存在する。頼原退蔵校注山崎喜好増補『芭蕉句集』(日本古典全書)に、

草の戸の月や其まゝあみた坊 はせを

とあるのが、それである。紫羊文庫所蔵の由、未見である。これによって、前文のない句だけのものもあったことが知られる。成立過程にあてはめるならば、最も初期のものともみるべきであろう。『一葉集』が水戸家旧蔵真蹟の系統であるのは、多分、文化十年の本問家の刊本に従ったためであろう。安政二年の西馬の『一翁四百集』は、『小文庫』によっている。明治二十四年の『芭蕉句選』は、『小文庫』によっている。明治二十四年の『芭蕉句選』は、『小文庫』によっている。

蕉翁一代集』は、『小文庫』の本文を、水戸家旧蔵真蹟の本文によつて校訂している。以後勝峯晋風の『新芭蕉一代集』の、出所不明の本文が現れるまで、特に変つた本文は見られない。水戸家旧蔵真蹟が『芭蕉図録』に収められた際の、山崎喜好氏執筆の解説に、

なほ『此まこと』(寛政四年)序によると、「むかし蕉翁此はとりて在て、柴の戸や月を其まゝ阿弥陀坊とみやび申されし光、四方を照らす。師猶其跡をのこさんと双林寺の離外を明き南無庵を造り芭蕉堂を営。」とあり、蘭更はこの句が京都東山の辺で詠ぜられたものとしてゐたやうである。

とみえる。『此まこと』は、双鳥編、芦漣序、車蓋跋、蘭更が京都東山の双林寺に芭蕉堂を作り、一碑を建立した折の記念集である。この『此まこと』の伝える形は、他に所見がなく、真偽の判定が困難である。

成立年は、土芳が元禄四年としたのを受けて、それに従う説が多い。岡田利兵衛氏は、『芭蕉の筆蹟』において、水戸家旧蔵真蹟の特色を、

- (一) 全字が端正なまるみがあって、自由性に乏しい感がする。
- (二) 仮名落歌の「はせを」が貞享後期様式にちかい。
- (三) 「や」は三例あるが、「月や」の「や」が極端に杖が短い。
- (四) 「山」が元禄三年の「此筋・千川宛書翰」の落歌「山翁」の「山」に酷似している。

の四点に絞られ、特に鶴によつて、元禄三年の執筆と考えられたが、「行動アリバイ」の面から、幻住庵を出て膳所にいた三年八月よりも、四年九月の帰東出発前とする方が可能性があると述べておられる。これは、この句文が京都東山辺で作られたとする前提に従つたものである。

それに対し、京都東山とは関係なしに、伝来の面から成立を探ろうとする説がある。荻野清・大谷篤蔵校注『校本芭蕉全集第二巻発句篇下』(昭和三十八年)は、この真蹟が常陸の本間家に伝わつたことから、「或いは貞享四年秋鹿島詣の途次、自準亭で成つたものと考えられなくもない」とされるが、芭蕉が鹿島詣の帰りに立ち寄つた自準亭は、本間家ではなく、行徳の小西似春であると判明した(加藤定彦氏「小西似春の研究」文芸と批評三の四、昭和四十五年五月、同「鹿島詣」の自準について)同三の五、昭和四十六年一月)から、この説は成り立たない。しかし、どのような経路で本間家に入ったかは、探索して見る必要がある。最近では、古典俳文学大系『芭蕉集』(昭和四十五年)が元禄五・六・七年の線を出したが、確かな根拠があつてのことではないらしい。更に、岩波文庫の『芭蕉俳句集』(昭和四十五年)は元禄年間とし、新潮日本古典集成『芭蕉句集』(昭和五十七年)は、貞享元禄年間とする。これらは、作品成立の契機を外的資料に仰いでいるために、大雑把にしか言えないのである。そこで、作品の内部から成立年次を探る必要に迫られる。

俳文「阿弥陀坊」は、芭蕉の西行への敬慕の念から生れた作品であるが、制作の動機はそれだけであろうか。もしそうだとすると、それは観念的で、いっどこでよまれたかという歴史的事情を把握することはむずかしい。それに対して、芭蕉が、西行の京都東山に住む阿弥陀坊という上人を訪れてよんだ和歌を前置きにして句をよんだ背景に、その阿弥陀坊に比すべき隠者が、実際に東山の界隈に住んでいて、その人に句を贈るという事情が介在していたとすれば、その句は、極めて現実性に富んだものとなる。その辺の事が作品の内部から引き出せないものかと思う。

まず(1)と(2)の段階では、西行の歌によまれた「あるじ」が「このもし」くて、句を詠じたようによみとれる。しかるに(3)と(4)になると、その「あるじ」が「このもし」くて、或は「なつかし」くて、「ある草庵の坊につかはし」たことになる。この場合の「あるじ」は、西行の歌によまれた「あるじ」であると同時に、芭蕉が句を遣した草庵の「あるじ」でもあった。この二重の構造を、(3)の文章によって、具体的に分析しておく。

柴のいほときけばいやしきなくれどもよにこのもしきものにぞ有ける

このうたは東山に住ける僧をたづねて西行上人のよませ給ふよし、山家集にのせられたり。いかなるあるじにやとこのもしくて、ある草庵の坊につかはしける。

しばのとの月やそのまゝあみだ坊 ぼせを

この、西行の歌と芭蕉の句に挟まれた文の中で、右に傍線を付した部分は、西行の歌の阿弥陀坊の説明であるが、左に傍線を付した所から、芭蕉が句を遣した「草庵の坊」のあるじへの敬慕の念に転ずる。これは(4)の場合も同様である。こうした(3)(4)の文を踏まえて(5)を読むと、その「いかなる住居にやと先その坊なつかしければ」の「住居」は、西行の歌によまれた「住居」なのか、芭蕉が句を送ろうとする人の「住居」なのか、必ずしも判然としな

い。  
こうした二重の機能を有する文章は、正確な意味の伝達をはかる言語とはいえない。しかし、言語が作者の精神の形象化であるならば、それはまさしく芭蕉の気持を表現しているといえよう。西行の歌に現れる「阿弥陀坊」と、芭蕉が句を送った「その坊」とは、芭蕉の気持の上で区別はなかったのである。

そうした西行の世界と、現実の芭蕉自身の気持との一体化をはかろうとする意図は、発句に端的に現れている。この句を構造的に見ると、

柴の戸の月はそのまゝ阿弥陀坊だ。

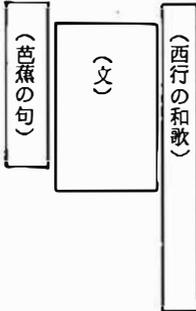
という見立ての關係になる。柴の戸の内に合掌する僧を背後から照らす月は、阿弥陀の光背にも似て、それがそのまま阿弥陀坊なのだ。西行の歌には「月」はなく、従って雑の部に含まれる。それに対して、芭蕉の「月」は、それが当座の景物であったことを

思わせ、成立年次推定の手掛りとなる。「そのまま」は、月光に照らされた草庵がそのまま阿弥陀坊であることを示し、現実の景色を表わしているのだが、同時にそれは、西行の歌を送った阿弥陀坊そのままという、これまた二重の構造を取る。これによって、西行と芭蕉とを隔てる時間の懸隔は一挙に解消される。

芭蕉の古典撰取の態度は、許六の『篇突』によれば、「直にして作意なく取る貞門の「むかし」、「無理を伝て大にはたらき大きに笑」う談林の「中比」に對し、

古事・古歌を其まゝたて置、少もからず、己が作意をならへて尽す。

という点に特色があると指摘されている。この「阿弥陀坊」の構成を图示すると、



となり、右の許六の説明は、びたりとあてはまる。

芭蕉が古典と自句とを対峙させて、それを文でつなぐ形式の俳文を書くのは、既に天和元年に遡る。その年の冬の執筆と考えられる「乞食の翁」は、最初に二行の杜甫の詩が置かれ、次に文があり、最後に芭蕉の発句が四句並ぶ。その中間の文に、「老杜に

まされる物は独多病のみ」とあり、芭蕉が自己の境遇を杜甫にたぐえようとする意図が明瞭に看取される。これは、真蹟が『俳句昭和三十六年八月号に紹介され、影印が岡田利兵衛氏の『芭蕉』(芭蕉の本別冊、昭和四十七年)ののっている。

また、元禄五年刊『継尾集』所載の「ゆふばれや」の句文は、最も「阿弥陀坊」の形式に近い。

西行桜 西行法師

象潟の桜はなみに埋れて

はなの上こぐ蟹のつり船

花の上漕とよみ給ひけむ古き桜も、いまだ蛸瀧寺のしりへに残りて、陰波を浸せる夕晴いと涼しかりければ

ゆふばれや桜に涼む波の花 芭蕉

『泊船集』『三冊子』は、これをそのまま摘記し、『三冊子』は、「此句は古歌を前書にして、その心を見せる作意成べし」という評を加える。それは、適切な扱いというべきであろう。それに対して、『校本芭蕉全集』第六巻は、

『継尾集』に、この句文の前に「西行桜」と題し「象潟の桜はなみに埋れてはなの上こぐ蟹のつり船 西行法師」の歌を掲げ、『泊船集』以下いずれもこの形を襲っているが、「西行桜」とあるのは『継尾集』の部立名で、西行の詠もまた編者不玉が掲げたもの。ともに芭蕉文中のものではない。

とされ、『定本芭蕉大成』も同様の趣旨を述べているが、果して

そうである。現に、土芳の『蕉翁句集』や、大虫の『芭蕉翁真蹟拾遺』は、西行の歌を省いたものを載せるが、それだと「花の上漕とよみ給ひけむ」という文章の発端が極めて唐突で、西行の歌を知らない者にとつては、理解のしようがない。やはり、西行の歌を前置きにして、その風情を眼前の象潟の風景に求めたとみるべきであろう。

芭蕉が象潟を訪れたのは、西行死して五百年、季節も春ではなく夏であったが、芭蕉はその懸隔を一举に縮め、西行の歌の風情を「桜に涼む波の花」と表現した。「桜に」は、勿論現実には桜が咲いていたのではなく、「波の花」に「桜」を見立てたのである。「桜に」の「に」は、「月やそのまま」の「そのまま」に等しく、過去と現実をストレートに結ぶ助詞である。

こうしてみると、芭蕉の俳文「阿弥陀坊」は、西行の和歌と直接に重ね合わせてみるのが妥当であり、その成立時期も、芭蕉が在京していて、東山の坊に句を送り得る状態にあった時に限定すべきであろう。名月の時期に芭蕉が在京していて、東山の坊に句を送る機会があった時といえば、岡田氏の述べられたように、元禄四年の秋の東下の前とみるのが最も妥当な線ではなからうか。そしてその東山の草庵は、後に蘭史が芭蕉堂を宮んだ双林寺とみて、まず間違いなからうと思う。

## 研究室受贈図書雑誌目録Ⅱ

- 学大国文 第二十五号（大阪教育大学）  
香椎潟 第二十七号（福岡女子大学）  
活水日文 第五号、第六号（活水女子短期大学）  
活水論文集 第二十五集  
金沢大学教養部論集 人文科学篇 19  
金沢大学国語国文 第八号  
金沢大学文学部論集 文学科篇 創刊号、第二号  
岐阜女子大学紀要 第十一号  
岐阜大学国語国文学 第十五号  
近代文学論叢 谷崎潤一郎研究（北海道大学旭川分校）  
群馬県立女子大学紀要 第二号  
研究紀要 第五号（尚綱大学）  
言語学論叢 第一号（筑波大学）  
言語文化 18（一橋大学）  
高知大國文 第十二号  
甲南国文 第二十九号（甲南女子大学）  
甲南大学紀要 文学篇 44  
語学と文学 第二十一集（群馬大学）  
国語学研究与資料 第六号  
国語研究 第九号、第十号（九州大谷短期大学）